

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520023

研究課題名（和文）

ハイデガー存在思惟における「聖なるもの」の位相—「倫理」の基底への問い—

研究課題名（英文） The phase of “the Sacred” in Heidegger’s Ontology  
—the question to the base of “the ethic”

研究代表者

寿 卓三（KOTOBUKI TAKUZOU）

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：30186712

研究代表者の専門分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：哲学、倫理学、聖なるもの、教育

### 1. 研究計画の概要

- (1) ハイデガーの存在思惟を「聖なるもの」という視点から再構成する。
- (2) ハイデガーの存在思惟が、「自己」の多面性・複数性という地平と親和性を持つことを明らかにする。
- (3) ハイデガーの存在思惟における「聖なるもの」が、「倫理の基底」の解明という位置価値を持つことを明らかにする。
- (4) 「教育」を倫理の生成する場として再構築する可能性を探る。

### 2. 研究の進捗状況

ハイデガーの存在思惟を「聖なるもの」という視点から捉え返すことによって、「倫理」を再構築する可能性を探ると同時に、倫理の揺らぎをもたらす負の帰結がもっとも顕著に現れている教育における「権威」の可能性を切り拓くという研究課題に精力的に取り組んでいる。研究方法は、3人の研究者を中心としてそれぞれの研究成果を持ち寄って討議するほか、学校現場の教員の授業事例に関する事例研究を行うという手法をとっている。過去3年間の研究の結果、以下の成果をあげつつある。

- (1) 「公共性」概念および「自律」概念の再構築の必要性

ハイデガーによる各私性という視点からの平均的日常性批判を、ヘルダーリンとの創造的対話という通路を通して捉え返す研究を進めている。また、芸術と倫理との密接な関連性、「性

の事実性」に関する歴史的考察も行っている。これらの研究によって、総駆り立て体制という同質化の圧力によって能動的関与が強要される〈共同社会community〉に対して、個人の自律性を基盤としながら相互に支え合う〈協働社会association〉を構想していく必要性、そして、「各私性」という位相の積極的可能性が明らかになりつつある。

- (2) 協働的な学習を切り開く原理としての「聖なるもの」の解明

受験・選別という受動的能動を強いられる状況のなかで、学習者が、他者との協働関係を可能にする「溜め」や「有能感」を習得するのはきわめて困難なことである。このような状況を打破する上で、それぞれの学習者を根本において突き動かしているものが、単に利己的なものではなく、自他にとってよりよき状態を切り開きたいという願望、つまり「聖なるもの」への感応力が有効であることが明らかになりつつある。この研究は、市民意識の育成という課題にも応えるものとなりつつある。

### 3. 現在までの達成度

- ②おおむね順調に進展している。  
(理由)それぞれの研究者が、研究討議を進めながら、論文発表や学会発表を着実に進めている。また、学校現場との共同研究も着実に進めている。

#### 4. 今後の研究の推進方策

平成19、20、21年度に引き続いて平成22年度も、本研究の中心課題であるハイデガーの存在思惟を「聖なるもの」という視点から再構成する研究は精力的に行う予定である。と同時に、その研究成果を踏まえつつ、ハイデガーの存在思惟における「聖なるもの」という位相によって、その存立基盤が揺らいでいる「倫理」にとって、どのような地平が切り開かれるのか、そしてそのことが「教育」の再生にいかなる貢献をなし得るのかについて三者がそれぞれ以下のような視点から考察を深化させていく予定である。

研究代表者の寿は、ハイデガーにおける各私性という視点からの平均的的日常性批判を、個人の自律性を基盤としながら相互に支え合う〈協働社会〉への通路を切り開くものとして読み解き、その成果を教育現場におけるシテイズン・シップ育成の営みと関連づけていく作業を引き続き行う。その際、「聖なるもの」を「死への存在」と関連づけて捉えていきたい。また、この研究の成果をフランスにおける国際シンポで発表し、今後の研究課題につなげていく予定である。

上利は、引き続き、アジアにおける文化の多様性・重層性という視点も加味しつつ、倫理と芸術との密接な連続性を日常生活空間の歴史的蓄積という視点から再把握、再構成することによって、生活形式そのものを問う営みとして倫理的問いを問い直す予定である。

森は、20世紀初頭のプロテスタント神学の中での論争という文脈の中で中世の神秘主義を読み直すことが、ハイデガーにとっての現象学受容にとって大きな背景になっており、かつ、このような問題意識が、ハイデガー以降の現象学においても「神学的転回」をめぐる論争という仕方で反復されていることを明らかにし、この問題が「聖なるもの」の位置づけの変容（現代における霊性の問題）と直結することを明らかにする予定である。

#### 5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計9件）

寿 卓三（研究代表者）

1 「「真理（a-letheia）への原初的問い＝哲学」の現場としての〈教育〉の可能性に向けて」、愛媛大学紀要 56号、2009年、301～310頁。

2 「ハイデガー哲学における「公共性〈批判〉」の広表」、電子雑誌 *Heidegger-Forum* 3巻、査読有、2009年、13～28頁。

3 「「公共性」と「開示性」とのあい」、愛媛大学教育学部紀要第55巻、査読無、2008年、1～26頁。

4 「ハイデガー存在論における〈政治〉の位

相—ハンナ・アーレントとの対質を通して—」、愛媛大学教育学部紀要 54巻、査読無、2007年、13～22頁。

上利博規（研究分担者）

5 「グローバル化時代の地域文化の可能性を県内企業から探る」、『地域研究』（静岡大学人文学部）1巻、2010年、105～121頁。

6 『『百科全書』に見る art と職人技術 Arts and Crafts in Encyclop&eacute;die』、人文論集（静岡大学人文学部）60巻、査読無、2009年、1～21頁。

森 秀樹（研究分担者）

7 「再帰的近代のアポリアと市民性教育の課題—グローバル化時代の 市民性教育としての「子どものための哲学」（1）—」、兵庫教育大学研究紀要第35巻、査読無、2009年、89-102 お頁。

8 「開示性の自然学的記述の意味、理想 No.680。査読無、2008年、27～37頁。

9 「初期ハイデガーのピュシス論の射程」、電子雑誌 *Heidegger-Forum* 2巻、査読有、2008年、76～89頁。

〔学会発表〕（計2件）

寿 卓三（研究代表者）

1 「ハイデガー存在論における「公共性〈批判〉」の広表」、ハイデガー・フォーラム第3回大会、2008年、学習院大学

森 秀樹（研究分担者）

2 「初期ハイデガーのピュシス論の射程」、ハイデガー・フォーラム第2回大会、2007年、京都大学

〔その他〕

愛媛大学教育学部紀要

<http://www.ed.ehime-u.ac.jp/~kiyou/>

ハイデガー・フォーラム

<http://www.shujitsu.ac.jp/shigaku/hf/index.htm>